

幕末、維新、そして明治を駆け抜けた宇和島藩

1. はじめに

かつて江戸時代も末期、四国の西南、伊予宇和島藩 10 万石に松平春嶽、山内容堂、島津斉彬と共に「四賢侯」と称された藩主がいた。伊達家の 8 代目宗城（むねなり）である。宇和島という地は四国の果てといっても過言ではない。外様であり、石高も 10 万石ほどで決して多くはない。だが、これが高野長英を匿い、大村益次郎を育てあげ、薩長土肥の雄藩と並んで幕末に大いに国政に関与したのであった。なぜ、このような藩が指導的な役割を果たすことができたのだろうか。今回は藩主宗城に焦点をあてて、彼自身の活躍のみならず彼の下で育った藩士たちが、激動の幕末、維新、そして明治の新しい世を疾風の如く生き抜いていった姿を振り返っていきたいと思う。

2. 宇和島伊達家の経緯

慶長 19 年（1614 年）父政宗とともに大坂冬の陣に出陣していた長子伊達秀宗は 12 月 28 日、将軍秀忠より伊予宇和島 10 万石を与えられた。政宗は関ヶ原合戦の時、家康より自軍に味方すれば百万石を与えるという「お墨付き」をもらっていたが、戦が 1 日で決着し、どさくさ紛れの行動（和賀一揆）が咎められて約束は反故にされた経緯があった。今更の 10 万石ではあったが、秀吉の偏諱（へんき）を受けて、その猶子となっていた秀宗の身の振り方に腐心していた政宗にはありがたかったに違いない。その一方で幕府には、伊達の力を東西に二分する狙いもあったとも思われるのである。慶長 20 年 3 月、秀宗は家臣団「五十七騎」とともに板島丸串城（後の宇和島城）に入城し、ここに「西国の伊達」が始まったのである。

伊予宇和島の地はリアス式海岸で急峻な山岳が迫っており、大きな川もなく干ばつと洪水には悩まされ続けていた。米は不足しがちで、苦しい財政のためにはハゼ（ロウ）や泉貨紙などの生産物にも税を課した。また、漁村には干鰯（ほしか）を奨励して、これにも課税したのである。それでも、新たな支配層と土豪ら地元の領民との間は緊張関係が続いていた。隣国の土佐では長曾我部氏の旧臣たちが、新しい藩主の山内氏に対して一揆を起こしている。宇和地方でも秀宗入部の年に暴動が頻発していた。領主に反旗を翻したのは、農村では一領具足、漁村では村君と呼ばれた土豪たちであった。彼らは実質的に地方を支配しており、新たな支配層が村々までその支配が及ぶことは難しかったと思われる。このような中で始まった領国の経営は困難を極めたのである。

元和 3 年（1617 年）ごろ、板島は宇和島と呼ばれるようになった。宇和島入部に際して政宗は秀宗に創業の資金として 3 万両（6 万両とも言われる）を貸し与えたといわ

れている。この返済を巡って藩論は紛糾した。総奉行山家（やんべ）清兵衛の提案により政宗隠居料として知行のうち毎年3万石を献上することになったものの、これがもとで彼は反対派に斬殺されることになったのである（和霊騒動）。政宗の死でようやく18年間にわたった仙台藩への支払いは終わったものの、秀宗の死の直前、彼の5男宗純への3万石分知という大問題が持ち上がった。寝耳に水の2代宗利は幕府大老（彦根藩主）の井伊直孝に分知の意思が無い旨を訴え出たが、結局のところ分知を受けざるを得なかったのである。この結果、宇和島藩は7万石に転落してしまったのであった。

3. 元禄の高直しと苦難の藩政時代

元禄6年（1693年）仙台三代藩主綱村の3男宗贇（むねよし）が宇和島伊達家を襲封した。3年後、10万石への「高直し」が認められたのである。7万石になっても幕府との関係は概ね秀宗時代にならっており、宇和島伊達家は国持大名格が維持されていた。しかし、10万石と7万石では格が違い、江戸城の登城した時の扱い、幕府への普請、献上品なども国持格を受けていた。しかし、今後を考えると、このような扱いがいつまで続くかは不透明であり、格下げを恐れたのである。それで、元禄8年（1695年）石高を10万石に戻す願いを提出し、新田開発等による表の石高の増加を図っていった。すでに商業資本と協同で干拓などは進めていたが、それでは到底足りず、収穫の見込みない田畑も加えて10万石の「数字を作った」のである。

10万石に認められると、直ちに10万石の大名に叶う軍役、普請が課されることになった。湯島聖堂のお手伝い、赤坂溜池の堀浚いと次々に賦課されたのである。10万石になっても収入が増えるわけではなく、最終的には生産者たる領民の負担になっていたのである。南予の山は段々畑が多いが、これは何ととっても困窮の表れなのであった。今に残る遊子水荷浦の段畑などがこれを物語るのである。正徳元年（1711年）宗贇3男の村年が4代藩主を継いだ。この時代、享保13年から数年間、台風や蝗害など天災が宇和島を襲った。村年は享保18年8月、大飢饉を乗り越えるために、家臣を集め「半知借上」とする旨を伝えた。藩政改革の始まりであったが、2年後村年は参勤交代の帰国の途中、播州加古川で急死したのである。享年31歳の若さであった。

第5代村候（むらとき）は11歳で藩主となったが、その治世は60年に及ぶ宇和島中興の祖である。文武・忠孝を奨励し藩士と庶民共学の藩校、内徳館を開設した。蠟や紙の専売制を進めて農政改革を断行、租税改革も推進している。これらの一連の改革は一定の成果はあげたが、天明の大飢饉が発生し疲弊した農村では一揆や村方騒動が頻発した。寛政6年、三百諸侯屈指の名君とまで言われた村候は失意のうちに死去したのであった。次の6代藩主村壽（むらなが）も殖産興業に努め藩政の改革を進めたが、天災が相次いだうえに、財政再建を巡って家臣たちの紛争がおこった（萩森騒動）。宇和島に苦難の時代は続いたのである。

4. 宗紀、宗城の藩政改革

文政7年(1824年)7代藩主になった宗紀(むねただ)は就任すると、すぐさま藩政改革に着手した。知行の借上げのほか、参勤交代の費用などを節約し、そのほかにも儉約令は幾度も出したのである。また、自らも厳しく律していた。何と云っても最大の懸案は20万両を超える借金であった。大半は大坂の商人からのものであった。これを200年賦という事実上の帳消しにしたのである。これは反面、宇和島藩の大坂商人に対する信用をも失墜することを意味した。したがって、今後一切藩は大坂商人に借財を申し入れないという決意表明でもあったのである。今風に言えば、国債に頼ることなく、単年度のプライマリーバランスを保つことを決意表明したのである。

天保9年、藩士の小池九蔵と若松総兵衛を農学の専門家佐藤信淵のもとに派遣し、農政改革を推進した。また、紙や蠟の専売制を入れて、藩の増収を図った。これらの施策は一定の成果をあげて、彼の引退時には6万両の資金が貯まっていたという。引退後は浜御殿の一部を彼の隠居所とした。りっぱな庭園があり、これを天赦園(てんしゃえん)と名付けられた。政宗の漢詩にあやかっただけのものであった。

弘化元年(1844年)宗紀は53歳で引退し、宗城(むねなり)が8代を襲封した。宗城は旗本山口家の出身で江戸育ちであった。これを養子に迎えたのだが、翌年宗紀に男子(のちの9代宗徳:むねえ)が生まれたので、宗城はこれを養嗣子としたのである。幕末の宇和島はこの3代によるトロイカ体制になったのである。

嘉永元年(1848年)宗城は密かに高野長英を宇和島に招いた。『夢物語』で永牢の判決を受けた長英は火災に乗じて脱獄し、お尋ね者として全国に指名手配されていた。これを招聘して、蘭書の翻訳やオランダ語の教育を期待したのである。長英が宇和島に居たのは9か月あまりで、その後鳴滝塾で同窓の二宮敬作のもとにも匿われている。その甲斐あって、宇和島では蘭学が盛んになってゆくのである。こののち、嘉永6年(1853年)周防の村田蔵六(のちの大村益次郎)が宇和島に招かれた。蔵六はもともと医者だが、宇和島では兵学書の翻訳や軍隊、軍艦の研究を期待されたのである。軍艦の製造にあたっては、八幡浜生まれの仏具、提灯づくりの嘉蔵(のちの前原巧山)を徴用した。彼は長崎に出張して学んだが、何度も試行錯誤のうえについて蒸気機関を積み込んだ船を完成させたのであった。また、卯之町の蘭方医二宮敬作のもとで修業していたシーボルトの娘いね(当時は失本いねと名乗っていた)を楠本伊篤(くすもといとく)と改名させて彼女を支えたのであった。また、彼女の娘タダも高子という名を与えて侍女として雇ったのである。彼女はのちに二宮敬作の甥、三瀬諸淵(医学、土木技術者)と結婚し、京都で暴漢に襲われた大村益次郎の最期を看取ったのであった。このように宗城は無名の逸材をしっかりと見出し、世に送り出していったのである。安政3年(1856年)物産方を設置して特産品の製造販売を進めていった。商品には蠟、紙、茶、干鰯などがあったが、実際に藩の財政に寄与するまでにはならなかったのである。

5.幕末維新の宗城の活躍

宗城は福井藩主・松平春嶽、土佐藩主・山内容堂、薩摩藩主・島津斉彬と交流をもち、幕末の四賢候とも称された。しかし、一橋慶喜を擁立するグループに属していたので安政の大獄が起こると、大老井伊直弼によって隠居謹慎を命ぜられた。9代藩主には先代宗紀の実子（隠居後に生まれた宗徳：むねえ）があったのでこれが就任した。だが、その後も藩政の実権は宗城が握っていたのである。翌年、桜田門外の変で井伊が暗殺されると、宗城は政界に復帰して引き続き公武合体を推進した。文久3年（1863年）以降、参与会議などにも参加したのである。これは四賢候（松平春嶽、山内容堂、伊達宗城、島津は斉彬の弟の久光）と徳川慶喜（将軍後見職）、松平容保（京都守護職）からなる国政の合議機関であったが、ほとんど成果のないまま瓦解した。さらに慶応3年（1867年）5月、薩摩藩の主導で上記の参与会議と同じメンバー（松平容保を除く）による四候会議がもたれた。議題は長州問題と兵庫開港問題であったが、慶喜は粘り強く会議を主導しつつは兵庫開港の勅許を獲得したのである。こののち、薩摩藩は慶喜を見限り倒幕に舵をきることになり、一方、山内容堂や伊達宗城はこれと距離をおいて、大政奉還へと進んでゆくことになるのであった。

第二次長州征伐のころ、慶応2年（1866年）、長崎に蒸気船購入のため来ていた松根図書に英国公使ハリー・パークスから楠本いねと異母弟の通訳、アレクサンダー・フォン・シーボルトを通して宇和島訪問の打診があり、これを受けたのである。旗艦プリンセス・ロイヤル号、測量船サーベント号が入港すると宇和島の町は大騒ぎとなった。宗城と宗徳も軍艦に乗船したが、宗城がワーテルローの戦いについて尋ねたので提督は驚いたと述懐している。パークスは宇和島の宗城を高く評価することになったのである。また、同年12月には英国書記官アーネスト・サトウが来航した。宗城はサトウとも親しく交わったのである。

慶応3年（1867年）12月、王政復古の後、議定に任命された。翌年、鳥羽・伏見の戦いが始まると慶喜を朝敵とするは薩長の陰謀であると抗議して、議定を辞任している。以後、政治的には中立の立場を鮮明にしたのである。これには藩財政のひっ迫や連枝の伊予吉田藩を継いだ実弟の宗孝（むねみち）が佐幕派の態度をとったこと、また、仙台藩が奥羽越列藩同盟の盟主になったことなども影響したと思われる。

明治になると、海外に通じていた宗城は新政府の外国掛、外国事務総督に就任した。外国人襲撃事件（堺、神戸、パークス襲撃事件など）の解決に奔走するほか、明治4年（1871年）、全権大使として欽差大臣李鴻章と日清修好条規の締結に尽力している。同年、廃藩置県によって、秀宗から9代256年続いた宇和島藩は消滅した。その後は外国賓客の接待などを担当したのである。明治14年（1881年）、ハワイのカラカウア国王が来日した時にはその接待を任されており、返礼として勲章を授与されていたのである。明治17年（1884年）、宇和島伊達家は華族に列せられたが、宗城の活躍を評価されてその地位は侯爵であり、戊辰戦争で朝敵となった仙台藩の伯爵を上まわったのであった。

宗城がその波乱に富んだ生涯を閉じたのは、明治 25 年（1892 年）12 月 20 日のことであつた。

6 宇和島人、明治を駆ける

宗城が中央政府を退くと、旧藩士も多くが帰国したので、中央で活躍する者は数えるほどしかいなかったのである。それでも旧藩士たちは明治の世の中をしっかりと生き抜いたのである。民間では大和田健樹（国文学者）、末広鉄腸（ジャーナリスト）、油屋熊八（実業家）、穂積陳重（ほづみのぶしげ 法律家）、児島惟謙（こじまこれかた 裁判官）、土居通夫（実業家）、高島華宵（画家）、松根東洋城（俳人）など宇和島出身者が活躍したのであつた。彼らは教科書に載ってはいなくとも、その足跡を歴史にしっかりと残したのである。このうち、3 名についてももう少し述べてみよう。

・土居通夫（1837～1917）実業家

天保 8 年（1837 年）宇和島藩士の家に生まれる。剣術を習得し勤皇を志し一時脱藩するが後に許されて帰藩した。維新後、五代友厚に認められて司法局を経たのち、かつての両替商である鴻池家の顧問となりこれを機に財界に入ってゆく。大阪電灯（株）（後の関西電力）など数多くの会社の経営者となり、大阪商業会議所の会頭に就任し大阪経済の発展に貢献した。

・児島惟謙（1837～1908）裁判官

土居と同年生まれで、宇和島藩士の出である。彼と同じく勤皇を志して戊辰戦争にも参加している。司法省に入省後、いくつかの裁判所を経て明治 24 年大審院院長に就任した。同年発生した大津事件（訪日中のロシア皇太子を警備にあたっていた巡査津田三蔵が斬りつけ負傷させた）の際、政府が大逆罪適用を望む中、これを退けて司法権の独立を守ったとして高く評価された。

・油屋熊八（1863～1935）実業家

文久 3 年（1863 年）宇和島の米問屋に生まれた。米問屋の商売ののち渡米、帰国後はもっぱら別府温泉の開発に取り組んだ。亀の井ホテルや亀の井バスなどの創業者である。女性ガイドを乗せた定期観光バスの元祖でもある。別府のほか、湯布院温泉や城島高原など広域地域開発にも着手し、地元経済に大いに貢献した。

7.まとめ

宇和島藩はわずか 10 万石の小藩ながら、薩摩（77 万石）、長州（37 万石）、土佐（24 万石）、肥前（36 万石）と肩を並べて幕末の国事に奔走した。7 代宗紀（むねただ）は財政改革を成し遂げ負債を整理して、8 代宗城（むねなり）が登場した時には藩庫には剰余金を残すまでに至ったという。宗城は高野長英、二宮敬作、大村益次郎、前原巧山、楠本いね、三瀬諸淵などの逸材を見出し、育ててこれを世に送り出したのである。彼らは幕末維新に大いに活躍したのである。彼自身は安政の大獄で井伊大老から隠居を命ぜ

られたので、藩主にあった時期はわずか 14 年である。しかし、その後も藩政、幕政ともにしっかりと足跡を残した。明治の世になっても外交を担当しているが、藩主であった人が活躍した例は他には皆無と言ってよいだろう。

その一方で、新政府を主導する薩長の下級藩士達にとっては、宗城ら旧支配層の諸侯は煙たい存在にほかならなかつたのであろう。宗城が早めに政府を去ると旧藩士達も帰国する者が多かつたこともあり、引き続いて中央で活躍する者は少なかつた。宇和島では幕末、流血沙汰の事件はほとんど無かつたが、これは宗城のもとに藩論が統一されていたからにほかならない。一にも二にも宇和島は宗城そのものだったのである。宇和島は殿様だけだつた、と揶揄する向きもあるが、私は決してそうは思わない。流血沙汰が無かつたのは結果的に良かつたのであり、人もしっかり育つていたのである。

初代秀宗は 10 万石のうち 3 万石を分知したため 7 万石になつた。そののち、元禄のころに 10 万石に戻したが、実高はそのままであつたので、度重なる飢饉などを必死で乗り切つてきたのである。この原動力は仙台藩に対する強烈なライバル心であつたに違いない。これが代々の藩主、家臣、そして領民にも DNA として受け継がれたのではなからうか。それが幕末維新の宗紀、宗城の活躍に、そして形を変えて進取の気概を持つた宇和島人が現れて明治の世を逞しく生き抜いたのであろうと思うのである。

【主な参考文献】

「シリーズ藩物語 宇和島藩」(宇野幸男著：現代書館)

「シリーズ藩物語 伊予吉田藩」(宇野幸男著：現代書館)

「仙台藩ものがたり」(河北新報社編集局編)

「歴史シンポジウム 2 幕末維新の宇和島藩」(愛媛県文化振興財団発行)

「幕末宇和島万華鏡」(田中貞輝著：風ブックス)

「えひめの記憶」(愛媛県生涯学習センター愛媛県史から)

「伊達宗城」(神川武利著：PHP 文庫)

「宇和島をゆく」(中村英利子編集：アトラス出版)

「児島惟謙」(楠 精一郎著：中公新書)

「劍客豹変 (小説土居通夫伝)」(小島直記著：PHP 研究所)

この他、宇和島市立伊達博物館、仙台市立博物館、宇和島市HP、ウィキペディアの資料を参考にした

資料の写真は一部(資料 26,28)は筆者が撮影したが、その他は主にウィキペディアから掲載した



資料 1：伊達宗紀（7代）



資料 2：伊達宗城（8代）



資料 3：伊達宗徳（9代）



資料 4：高野長英



資料 5：大村益次郎



資料 6：前原巧山



資料 7：二宮敬作



資料 8：楠本いね



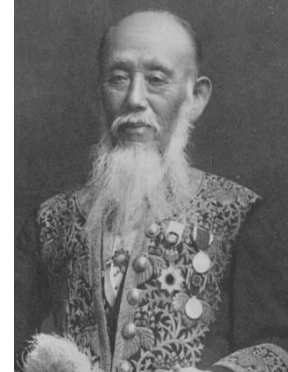
資料 9：楠本高子



資料 10：三瀬諸淵



資料 11：アレクサンダー・シーボルト



資料 12：児島惟謙



資料 13：油屋熊八



資料 14：大和田健樹



資料 15：穂積陳重



資料 16：松平春嶽



資料 17：山内容堂



資料 18：島津斉彬



資料 19：島津久光



資料 20：土居通夫



資料 21：ルナパークと初代通天閣



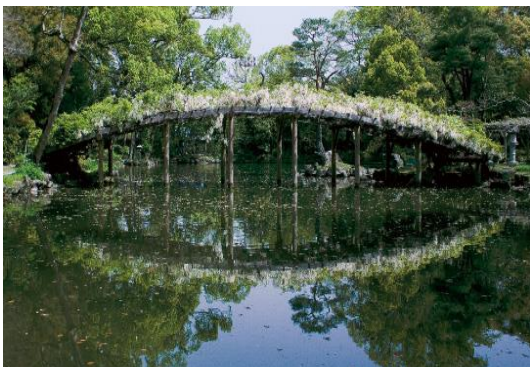
資料 22：今の通天閣

伺候席	対象	大名家							
大廊下	おおろうか	将軍家親族	御三家	御三卿	加賀前田102、	越前松平32	など		
大広間	おおひろま	国持格大名	薩摩島津77、 肥前鍋島36、 久保田佐竹21、	仙台伊達62、 伊勢藤室32、 (准国主大名)	熊本細川54、 備前池田32、 宇和島伊達10、	福岡黒田47、 鳥取池田33、 柳河立花10、	安芸浅野43、 阿波蜂須賀26、 二本松丹羽10、	長門毛利37、 土佐山内24、 など	
溜間	たまりま	臣下最高席	彦根井伊35、 小倉小笠原15、	会津松平28、 越後高田榊原15、	高松松平12、 庄内酒井17、	姫路酒井15、	松山久松15、		
帝鑑間	ていかんのま	譜代大名席	大和郡山柳沢15、 大垣戸田10、	小田原大久保11、 松代真田10、	福山阿部11、 など	佐倉堀田11、	小浜酒井10、	中津奥平10、	
柳間	やなぎのま	7万石以下5位の外様							
雁間	かりのま	城主格10万石以下の譜代							
菊間	ぎくのま	無城譜代大名、一部の旗本							

(数字は万石)

資料 23：江戸城伺候席 (上)

資料 24：天赦園 (宇和島市) と政宗の漢詩 (下)



馬上少年過 馬上少年過ぐ
 世平白髪多 世平らかにして白髪多し
 残軀天所赦 残軀天の赦す所
 不楽是如何 楽しまずして是を如何にせん

伊達宗城の経歴				
西暦	元号	年齢	出来事	参考
1818	文政1	0	旗本山口直勝の二男として江戸で生まれる	
1828	文政11	10		シーボルト事件
1829	文政12	11	伊達宗紀の世子となる	
1835	天保6	17	元服し宇和島に入国する	
1839	天保10	21		蛮社の獄
1840	天保11	22	鍋島齊直の娘猶姫と結婚	アヘン戦争
1844	弘化1	26	家督相続し、8代藩主となる	高野長英、脱獄する
1848	嘉永1	30	宗城、高野長英を匿う	高野長英、宇和島に潜伏する
1849	嘉永2	31	二宮敬作、高野長英を匿う	高野長英、卯之町に潜伏する
1850	嘉永3	32		高野長英、自害(47)
1853	嘉永6	35		ペリー、浦賀に来航
1855	安政2	37	村田蔵六に、軍艦を造らせる	
1858	安政5	40	井伊大老により、隠居に追い込まれる	安政の修好通商条約締結
1860	安政7	42		桜田門外の変
1862	文久2	44	上京し、公武合体をすすめる	
1864	元治1	46	慶喜と対立し、参与を辞任	禁門の変、長州征伐
1866	慶応2	48	英国のパークス、宇和島来訪	薩長同盟、第二次長州征伐
1867	慶応3	49	四候会議、議定となる	大政奉還
1868	明治1	50	外国官知事となる	鳥羽伏見の戦い、上野戦争
1869	明治2	51	民部卿兼大蔵卿に就任する	大村益次郎刺客に襲われる(45)
1870	明治3	52	民部卿を辞す	
1871	明治4	53	全権大使として日清修好条規調印	廃藩置県
1877	明治10	59		西南戦争
1879	明治12	61	岩崎弥太郎と東京海上保険会社の設立に関与	
1881	明治14	63	勲二等旭日重光章を受章	明治14年の政変
1889	明治22	71	7代宗紀死去(98)	
1890	明治23	72	勲一等旭日大綬章を受章	
1891	明治24	73		大津事件
1892	明治25	74	宗城、東京今戸屋敷にて死去	